

雅びの道 : 宣長の文藝論の一理解

城福, 勇

<https://doi.org/10.15017/2339071>

出版情報 : 史淵. 36/37, pp.105-124, 1947-03-31. 九州帝国大学法文学部
バージョン :
権利関係 :

雅びの道

宣長の文藝論の一理解

域 福

〔小論は筆者の宣長研究の一部をなすもので、これだけを抜き出すと前後のつながりを失ひ、わがりにくくなることを恐れる。意圖するところはもとより彼の文藝論を窺ふにあるが、この場合著者は『物のあはれ』説が彼の所説を代表するものであることを通説に従つて認め乍ら、尙且『みやび』論がもつと注意されてよ

本居宣長は後年自身の「物まなび」の次第を回顧し、歌學は契沖によつて開眼されたといつてゐる。

彼は生來歌文を好み、既に十七・八才の頃から「集ども、古きちかきこれかれとみて」、當世風な誂みさまに従つて歌を詠んでゐたのであるが、京都に遊學するやうになりはじめて契沖の名を知り、その著述に親しむやうになつて、「此道（歌の道）の味、をのづから心にあきらかになりて」、つひに「近世のやうわるきことをさと」るに至つたといふ（玉かつま、増全八ノ五七頁、あしわけをふね、増全十ノ一九三）

頁)。即ち彼によれば契沖こそこの道の陰晦をなげき、古書によりて近世の妄説を破り、「はじめて」「本来の面目」を見つけた先覺だつたのである。この意味で、宣長が後に石上私澁言や玉のをぐしで説いた物のあはれ説——歌物語の本質は物のあはれにあるといふ「本體」の論は、契沖の説をうけて彼自身はそれを發展せしめたにすぎないことを自ら先づ認めてゐたと解すべきであらう。ところで同じ宣長に従へば、契沖は「哥道の本體を考へて、近來の妄説をやぶ」る事にのみ力を用ひ、「哥のよみかた、風體などのこと」には論じ及ばなかつた（あしわけをぶね、増全十ノ一九三頁）。これに對し彼宣長は、詠歌の風體古今の變化を考へて、所謂「風體」の説をなした。これは歌人としての宣長が、自身の詠歌の體驗を通して「發明」したもので、専ら「訓話にのみ力をつくし」（全上）、詠歌には不得意であつた沖師の遂に考へ及ばなかつたところであるといふのである。

宣長によれば、「哥の本分」は物のあはれにあるといふ本體の問題は、「古とても今とても、今より後迄も、すこしも盛衰も邪正も得失も……なければ」（全上一五二頁）しかし何をあはれと感じ、何を心ありと思ひ知るかは、時代により、人により、或ひは貴賤上下の別により相違がある。先づ上下の別についていへば

天子は天子のやうに、諸侯は諸侯のやうに、公卿大夫は公卿大夫のやうに、士農工商は士農工商のやうにて、をの／＼その哥もをのが分相應によみ出でたるものなり（あしわけをぶね、増全十ノ一七

同様に時代的にも、上古は上古の體、中古は中古の體、後世は後世の體と、その間に明瞭な區別が認められ、變化が考へられるのである。而も、かやうに、人の情態風俗の變遷につれて、移り變るのは「いや」といはれぬ天地自然の道理」（全集）であるから、今の世の人は、今の世の人情により、風俗に従つて詠むべきで、人情浮華なる時は、和歌も亦浮華に赴くのが當然である。（宛清水吉太郎警翰、書翰集六頁）。されば、

今は今の心にてよむがよき也、今の哥は哥の本意にあらずとて、咄來質料の體は、ありのまゝにまんとするは、かへつて哥の本意をうしなふ也（あしわけをばね、増全六ノ四七三頁）。と云ふは、今と考へたのであつた。かやうにして、歌の本分乃至本體の論とは別に「今」といふよりは、古本體の教につきて」（全集、一九三頁）詠歌の「風體」を考へるに至り、彼の庶幾する風體、風姿に相應する作歌論乃至表現論が改めて問はれるに至つたのであつた。

一體歌といふものは、「ひとの心をたねとして萬の言のはとなれる」（真之「古今集序」）ものであるがこゝにいふ心とは、宣長によれば「物のあはれをしる心」（石上私淑言、増全六ノ四七七頁）であつた。即ち、物のあはれとは、要するに歌の理念であつて、歌そのものではない。それは言葉によつて形象化され、而も「あや」ある詞に表現されて、はじめて歌と呼ぶことが出来る。とくに心に對して詞が、内容に對して形式が、問題になるのである。即ち、人が物のあはれを感ずること深き時は、「さてやみなむとすれども心のうちにとめははやみかた久」（石上私淑言、増全六ノ四九六頁）のその思は筋を詞に出し

て言ふものであるが、かやうに、あはれにたへずしておのづからほころび出づることばは、「必長く延きてあやある物」(全上)である。

それをたゞの詞にいふはあはれの淺き時の事也深き時は自然とあや有て長くいはるゝ也深きあはれはたゞの詞にいひてはあきたらず同じ一言も長くあやをなしていへば心はるゝ事をよなし(全上) (四八七頁)

即ち、歌といふものは、心が詞となつて表現されるものであるが、それは先づ、心が自身の内に内部形式として、長くひきてあやある詞を呼び、それが自然とほころび出た表出として理解することが出来る。次に、そのやうな表出は、「人の聞てあはれとおもふ所が大事」(全上、四八九頁)であるから、その詞に一層あやをなし、その意味で技巧的に聲をほどよく長めて歌ふといふ形成として理解されるであらう。後世の詠歌は、つくられたものとして、後者の意味が強いが、神代の歌とても思ふ心のありのままにはよまず必ことばをあやなして聲おかしくあはれにうたへる物である。されば技巧を用ふことも、或ひは技巧によつて新たに生み出された自然も、他の意味で「和歌の本然」と呼ばれねばならぬであらう。

右のごとくにして、宣長の場合、時には相對立する二つの面が、各々和歌の本然を示すものとして語られた。即ち、歌は人の實情に基づく物のあはれを宗とするといふ本質の問題と、今一つは、左様な本質にたち乍ら、尙且ひとの聞きてあはれと思ふところが大切であるから、詞をとゞのへ、聲にあやをな

し、調子よく詠まねばならぬ。このためには、人の實情にたがふこともあらうが、實情にたがふことも亦歌の本然であるといふ、いはゞ表現の問題であつた。前者が、歌の——といふよりは、文藝全體の意味的な「本體」論であるとすれば、後者は、形成的な「風體」論に外ならなかつたのである。

彼に従へば、歌を詠むことは、人の實情の發露であつて、難しいことでも何でもない。難しいのは、たゞよく詠み、よく作るといふことである。思ふ心のまゝに詠みあらはすのが、「哥の本驗」なら、その歌をよきやうにしたいと考へ、歌の風體を整へたいと願ふのは「哥よむ人の實情」である。歌のよしあしを問題にしないとすれば論の外であるが、「よきが中にもよきをえらび、すぐれたるが中にもすぐれたる哥をよみいでむとするが、哥の最極無上の所（あしわけをぶね、増全十ノ一五〇頁）であるから、この爲には、詞をえらび、意をもうけて飾るゆゑに實を失ふことも亦やむを得ない。それは、いはゞ表現の必然だからである。

哥はほどよくへうしおもしろくよくよまむとするゆへ、我實心とたがふことはあるべき也、このたがふ所もすなはち實情也（あしわけをぶね、増全十ノ一五〇頁）

既に萬葉の歌でさへ、多くはよき歌を詠まむと求めかざりて詠めるものであつて、實情のまゝとはいひ難いのである。即ち

上代の哥にも、枕詞序詞などのあるを以てもさとるべし、枕詞や序などは、心に思ふことにはあらず、詞のあやをなさん料に、もうけたる物なるをや（うひ山ふか、増全九ノ四九七頁）

といはれねばならないのであつた。

歌といふものは要するに、心が詞をよび、詞が心に相響くところに生れる。この場合、原理的には兩者が相互に限定し合ふと考へられるが、しかし眞によき歌は、限定し合ひながら相互に弱め合ふのではなく、却つて強め合ふがごとき調和に於てあらねばならぬ。而して宣長は、かくのごとき調和の一境を「みやび」と呼んだ。彼によれば、人は「心ことばのうるはしく雅たるにめでて、あはれと思ふ」(石上私淑言三卷全十ノ二七〇頁)ものであるから、人をあはれと思ほしめるを本意とする歌は、心も詞も「みやび」を旨としなければならぬ。然るに後の世は、心も詞もいやしく、汚ない。されば「哥はたと心におもふ筋をいひのぶる物ぞ」とて、今の世の人の心を、今のまゝなる詞を以て、ありのまゝに詠み出すとすれば、恰も當世の狂歌、俳諧、小哥、淨瑠璃のやうに「いといやしくきたなき」ものに墮ち、左様な有様ではたとひ實情より詠み出たとしても、「よも神も人もあはれとはきかじ」(柯れも、石上私淑言三、増全十ノ二〇五頁)といはれねばならない。

いかに物の心しらぬ山がつも、きしらぬながら猶みやびやかなる方をば、めでたしとはきくべし
(全上二〇七頁)

これが、彼の理解した歌のまことのあり方を示すものであつた。而も、かやうな意味でみやびを極め、

風體の至美、歌道の極盛をなせるものは、古今、新古今であり、物語では源氏である。彼は考へる。さればこれらの古典を「千載の規矩準繩」とすることによつて、はじめてさながらのみやびに住することが出来る。かやうにして、彼のいふ「雅び」は何よりもこの國の「中古のみやび」として、「一の古典的形式に外ならなかつたのであつた。其類は、古今の歌道に於て、最も古きものなり。其の源は、明の古の心によれば、歌止むものは下賤の者の今思ふことをありのまゝに詠むを誠の道と思ふは、却つて道の心にかなはず、心ことばのいやくきたないのは歌にして歌ではない。されば古への申以上の人情風儀をよく心得、今の心とは相違すれどもたゞ昔の歌にならひて、古人の情のごとくに詠むのが今の歌の詠み方である（繁文要領、増金十ノ三三頁）。といふのは、

今の人はいかほど風雅を好む人とても、むかしの哥又は物語などのやうには深くめづる事なし、いにしへの歌や物語を見るに月花をめづる心の深き事、又それにつけて思ふ事のすぢを感じてものゝ哀をしれる事など、今とは雲泥のたがひ也（全上）

と考へられるからであつた。かくて今の世に於て雅びを得るためには、明け暮れ源氏、伊勢などの「あはれなる文」に親しみ、古今新古今などの雅びたる歌を手本として學ぶうちに、自ら心もえんにやさしくなりゆきて古人の心になり、さながらのみやびを身につける事が出来る。それは歌の徳によつて、今のきたなき情のかはりてうるはしくみやびたる古への情になつたのであるから、「古へのをまねばは、はじめは偽事に似してゐるが、いつぬにはまことになり」て、また「詞を文なす道の心にもかなふ」も

のであると考へられたのであつた（石上私淑言、増全十ノ二〇八頁）。

宣長は、さきにもいふ様に、歌の「本體」については契沖の説を受けたが、「風體」については「わが心よりいづること」（あしわけをぶね、増全十ノ二八〇頁）であるから、自身の詠歌の體驗により自得するより外はないとしたのであつた。しかし、後の場合になつても、十分な意味で、彼を導く星となつたのは、中古の歌物語であり、更には中世の先達たちの教へであつた。既に詠歌については、「とほく定家卿を師として、そのおしへにしたがひ、その風をしたふ」（全上、一九三頁）と言つてゐるやうに歌學上一應區別づけられた詠歌に限る限り、彼の立場は著るしく古典的、傳統的であり、やがて、中世の歌人達の立場を襲ふものであつた。さうして、この立場を襲ふものは、さきにもいふやうに、中世の師範とあふぐこととあり也、予又此卿を以て、詠歌の規範とし、遠く哥道の師匠とあふぐ處也（あしわけをぶね、増全十ノ一八五頁）。

彼が古今集や新古今集を千載の規矩準繩と考へ、萬葉の耳遠き詞をさけると共に、後の世は心も詞も、いやしく汚ないと考へたのも俊成定家以来の堂上歌學の傳統を繼ぐものに外ならぬ。即ち定家のいふやうに「世くたり、人の心おとりて、なさけもよばず、ことばもいやしくなりゆく」（近代秀歌、久松博士編、中世歌論集一六〇頁）ものであるから、後世の鄙俗な心詞を避けて、専ら古歌に心を染めねばならない。しかし、爲世の教へてゐるやうは「さるくまみたればとて萬葉集の耳とをきことばなど努々

り」(兼良、古今集重校、群書類定十ノ五六二頁)といはれる中世の傳統から一步も出てゐなかつたのである。即ち彼は、二條派歌學の正風をうけて平淡を旨とし、この點から萬葉の歌の「今の世に耳遠き詞共」(玉のを、古今集九ノ二三七頁)は、「末の世の人の耳にとをくして、心に感ずることすくなし」(あしむはをぶね、古今集十ノ一八四頁)と考へると共に、定家の「餘情妖艶の體」(近代秀歌、久松博士、上掲書一六〇頁)を移して自身の理想としたやうに思はれる。餘情を伴ひながら豊艶な趣きをたへた感覺的な花やかさは、定家を主要な撰者の一人にもつ新古今集の風體美の至極せるものであり、やがて「詞の妖艶さらに比類なし」(河海抄、國文語釋全書所收一頁)といはれる源氏物語の風姿でもあつたからである。

かやうにして宣長は「美濃の家」の評語がよく示すやうに、「いもう」または「えん」なる風體を詠歌の理想と考へ、同時に「或はゆをれ故に」すこしも異風なることを嫌ふ」(正徹物語、久松博士、上掲書、三二七頁)二條派の中に正風をみへ反三條派の玉葉風雅の風體を「異風」(うひ山ふみ、古今集九ノ五〇二頁)として斥けた。かくのごとき彼が野守鏡の所論に耳をかたむけ(玉かつま四ノ爲兼卿の哥の事)、二條派中興の歌人頓阿を「近體哥甚上手」(宛岡田元善書翰、書翰集七八頁)と考へ、その歌集草庵集の注釋をつくつてゐるも尤もな事であつた。その「近體哥」の「近體」は「近體歌」の「近體」である。

以上の様にして、宣長は歌學と一應區別づけられた詠歌に關する限り、傳統的、古典主義的な中世歌人の立場を襲うてゐるが、この事から彼を直ちに「中世的」と考へるのは矢張り誤りであらう。即ち中世

的、古典的なのはむしろ當代の和歌そのものの性格であり、それは三十一文字の古典形式の中で、花鳥風月の雅懐をのべるといふいはゞ傳統のすさびに生きる世界であつたからである。宣長も亦世の常の歌詠みとしてこの世界にはいりこんで行つたのであるが、しかしそこには彼の詩心をつなぐべく餘りに奇怪千萬な傳統の埃でおほはれてゐた。ここに彼の新たな歌學——契沖に淵源せる古學的な歌學が誕生しなければならぬ所以があり、左様な新たな歌學を通して傳統の埃をはらひ、その底に眞の傳統として生きつゞけてゐる和歌の精神——はかなの道（定家）として或ひはみやびの道として生きつゞけてゐる和歌の精神を、本來の詩精神として高くかゝげることには彼の努力がかゝつてゐたといはれるであらう。

彼によれば歌物語は「風雅をむねとして、物のあはれを感じる處が第一」（あしわけをぶね、増全十ノ一八一頁）であるといふ。ところで、「雅び」とは、何よりも「古へのみやび」であつて、今の世のまゝなる現實とは違ふ。しかし、違ふと考へるのは歌學の上の現實論に於てであり、具體的な詠歌の場面に於ては、「みやび」こそ、眞の現實なのである。即ち、歌は人の實情のまゝによむ物と考へるのはいはゞ歌學の上の現實にすぎず、その歌をよきやうに作りなさうとし、詞をえらび、意を設けて、「我實の心とたがふこと」もある。「そのたがふ所もすなはち實情」ではないであらうか。後者はいはゞ詠歌

の現實に外ならない。それは前者に對して言へば「いつはり」かも知れないが、よく詠まうとする思ひにいつはりはなく、この意味で矢張り實情でなければならぬ。歌物語の現實とは、ぎり／＼の表現面に於ける現實、即ち詠歌上の現實でなければならぬ。而して、作者にとつて現實とは、客體的に與へられるものではなく、同時に自身の世界觀を通してみられたものである。「よくよまむ」と思ふ作者の、何を「よき」ものと考へるかといふ事が問題なのである。この關係を確めるために、彼の文學説の直接のよりどころであつた源氏物語螢の卷の次の文章をかへりみてみよう。

又かゝるよのふることならでは、げになにか、まぎるゝことなきつれづれを、なぐさめまし、さてもこのいつはりどもの中に、げにさもあらむと、あはれを見せ、つきん／＼しくつゞけたるはた

はかなしごとゝしりながら、いたづらに心うごき、らうたげなる姫君の、物思へる、見るにかた心つくかし、又いと有るまじき事かなと見る／＼、おどろ／＼しくとりなしけるが、めおどろきてしづかに又きくたびぞ、にくけれど、ふとをかしきふし、あらはなるなども有べし(玉のをくしより引

用)

、宣長は右の一節を、紫式部が源氏物語を作れる本意を述べたものであると考へた。而して、「げにさもあらんと、あはれを見せ」といふ一句をとらへて、「これ源氏物語のまなこ也、此物がたりは、しか物のあはれをしらしむることを、むねとかきたるもの也」(玉のをくし、増全七ノ四七六頁)考へたのである。長谷川如是閑氏はこの言葉を布衍して、「これは自然と人間とに觸れた『情のまこと』をありの

まゝに表現する文學で、今日の云ひ方によると現實主義的の文學である。「源語」はこの意味の文學に屬する（同氏、本居宣長の文學論、日本評論、昭和十四年十月號）と言はれた。これに對し、「いと有るまじき事かなと見るく、おどろくしくとりなしけるが、めおどろきてしづかに又きくたびぞにくけれど、ふとをかしきふし、あらはなる」といふのは、宣長のいふ「をどろくしき」文學で、今日の言葉でいへば、浪漫的又は夢幻的の文學であるといふのである（全上）。

説の當否は姑く置き、宣長がさきの源語の一齣をとらへて、そこに作者の文學觀をみ、式部の思想として文學に二種の別があることを指摘したことは明らかな事實である。その二種とは、「上にいへるげにさもあらむと云々、これ一種にて」後にいへる「おどろおどろしき事、これ一種也」といはれるものであつた。宣長は、「上のくさ（げにさもあらむ云々の文學）ぞ、この物語の本意にて、後の一種はたゞまれに興に書たるのみ」（玉のをくし、言金七、四七七頁）と考へたが、これは長谷川氏その他によれば源語は現實主義乃至寫主義の文學であるといふのであつた。

一體源氏物語は、浪漫主義の文學であるか、或ひは自然主義乃至現實主義の文學であるか、屢々問題にされてゐる。たとへば志田義秀氏は式部が物語に寫實主義と浪漫主義との區別がある事を意識し、そのうち寫實主義に價値を認めて自らこれによつたと考へられた。これに對し源語は理想主義乃至浪漫主義の小説であると考へる論者も少なくなく、更にそれは寫實的基礎の上に立つた理想主義の小説であるといつた折衷説も行はれてゐるのである。いま宣長を、左様な論者の何れかの、最も早いものとして引つ

け解するのは、果して彼を理解する所以であらうか。即ち近代の諸學者が源氏物語を、浪漫主義といひ、自然主義となすも、それらは要するに西歐風な文學の「論」であつて、それ以外の何物でもない。然るに宣長の物のあはれや雅びの説は、文學論であると同時に、彼自らの創作體驗を表白した作歌作文論であつた。たとへば「玉のをぐし」は、源語を對象とした物のあはれといふことの論であると共に、直接的に源氏の中にはいりこみ、この世界を「みやび」として體認したいはゞ源氏物語體驗に外ならなかつたのである。

一體現實主義、乃至寫實主義の語は、この國近代の自然主義文學を通して特殊な意味を擔はされて今日に至つた。即ち所謂自然主義の文學に於ては、一般的にいつて現實性を對象的、客觀的な方向に求め、左様な所謂客觀的現實に忠實であらうとするところから、人間のさまざまの欲情や激情を假借することなく描き出した。従つて、いふところの現實主義は、要するに客觀主義に外ならず、その根柢には、自己に對立するものとして客觀的な世界を考へた西洋近代の科學思想があつたわけである。

ところで源氏物語は右の意味で所謂現實主義乃至寫實主義の文學ではない。そこには情趣といはれるものがある。貴族的にロマンティックな感情がある。要するに主觀をしりぞけ、純粹客觀を事としよつとした近代自然主義の苛烈さがないのである。しかし乍らこの事から源語を浪漫主義の文學であると、一層考へ難い。少くとも、「卷々の中に、めづらしくおどろ／＼しく、めさむるやうの事は、をさ／＼なくて」、「はじめよりはりまで、たゞよのつねの、なだちかなる事の、同じやうなるすぢをの

み」(玉のをくし、増全七ノ五二二頁)書きつらねてゐるといふ意味に於て、矢張り浪漫主義の文學からは遠いものと考へる。尤も源氏の世界は我々今日の眼から、或ひは「浪漫的」と評する事も出来るであらう。この事は、しかし「作者の本意」が浪漫主義にあつたといふ證左にはなしがたい。即ち、浪漫主義とは、自覺的浪漫的だからである。

宣長に従へば、歌物語といふものは、「其善惡邪正賢愚をえらばず、たゞ自然と思ふところの實の情をこまやかにかきあらはして、人の情はかくの如き物ぞといふことを思せたる物」(紫文要領、増全十三〇六頁)である。この爲に、好んで題材を戀にとり、破倫の沙汰をも顧みないのは、「すべて好色のことほど人情の深きものはなき」(あしわけをぶね、増全十ノ一四九頁)からである。されば式部が、物はかなくしどけなく愚かなひとの思ひや、心弱く未練がましい性格を描いたのも、要するに人情のありのまゝを書きしるし、見る人に、人の情はかくのごときものぞといふことをしらしめんが爲である。人の心といふものは、「からぶみに書けるごと、一とかたにつきざりなる物」ではなく、「深く思ひしめる事にあたりては、とやかくやと、くだくしくめくしく、みだれあひて、さだまりなく、さまざまのくまおほかる物」と考へられるが、源氏物語は、「さるくだくしくくま／＼まで、のこるかたなく、いともくはしく、こまかに書きあらはしたること、くもりなき鏡にうつして、むかひたらむがごとくにて大かた人の情のあるやうを書るさまは、やまともろこし、いにしへ今ゆくさきにも、たぐふべきふみはあらじとぞおほゆる」(玉のをくし、増全七ノ五二二二頁)といはれるものであつた。果して、源語が

彼の證言するやうに女々しきばかなき人の情のまことを、残るかたなく、いとくはしく細かに書きあらはしてゐるとすれば、その意味で寫實主義乃至現實主義の文學であるといはれねばならないであらう。然らば所謂「げにさもあらむとあはれを見せ」た文學が、寫實主義乃至現實主義と一つに考へられるとすれば、それはどういふ事であらうか。

螢の卷の源氏の君の言葉によれば、物語とは、「まことはいとすくな」く、「いつはりどもの中に、げにさもあらむと、あはれを見せ」たものであつて、「そらごとをよくしなれたる口つきよりぞ、いひ出すらむ」と考へられる。この點物語は、何よりも虚構であつて、客觀的な現實ではない。それにもかゝはらず、物語に對するとき、「はかなし事と知りながらいたづらに心動き」、「いとあるまじきことかなと見るく」、その世界にひき入れられてしまふのは、虚構の世界に眞實を見出すからである。物語の世界にはかくて、客觀的な「まこと」はないが、主體的な「情のまこと」があり、後の意味で、主體的には矢張り現實的であつて、「みなかたぐひにつけて此世の外的事ならずかし」と考へる外はないのである。

何れにせよ、客觀的な「まこと」を、假りに現實と呼ぶならば、「情のまこと」は同じ意味で現實的ではなく、かへつて可能的なものである。かやうに、主體的な事實は、なほ客體的な存在ではないが、事實は存在の根據であるといふやうな意味を含むとすれば「人の心のまこと」に於て捉へられた「事の跡」は、客觀的な現實よりもかへつて、「道々しくくはしきことはあらめ」といふ外はない。「日本紀

などは、たゞかたそぼどかし」(以上何れも、源氏物語、螢の巻)といはれる所以であらう。

かやうにして、源氏物語は、人の情のまことに於て、「げにさもさらんとあはれを見せ」た文學であるといふことが出来る。それは、あやまりなく現實主義乃至寫實主義の文學であると考へることが出来るが、この場合現實とは客體の謂ではなく、むしろ主體のそれであり、更にいへば我々とはなれて存在しうる「まこと」ではなく、むしろ、それを内にふくんだ「情のまこと」を意味するものであつた。

ともあれ、源氏の世界には、我々今日の眼からみる時、非現實に近いものが少くないが、それとても當の式部にとつては、かけがへのない現實であつたかも知れぬ。少くとも宣長は、さやうに考へてゐたやうである。文學に於て、何が現實かといふ事は、作者が何を現實と考へたかといふ問題に置きかへられねばならぬ。宣長は、かくて、源氏物語が作者の「情のまこと」に於て、寫實を旨とした現實主義の作品であることを見てとつた。次に、歌人乃至作家としての彼は、進んで紫式部の現實を、彼自身の現實とし、さながらの「中古のみやび」の中に生きやうとしたのである。彼に従へば、歌といふものは、人の實情から出たものであるが、しかし實情だけでは未だ歌とはいへない。それは詞に表現され、而も「あや」ある詞に整へられて、はじめて「うた」なのである。これが、いはゞ歌の現實であり、歌人にとつて、歌を詠むといふ現實は、かゝるものとして存するのである。宣長の場合、かやうな歌の現實は直ちに「みやび」に外ならなかつた。

それは心と詞、花と實の調和として、後世の卑俗を去り、上つ代の耳遠さをはなれ、同時に賤者の情

に墮ちないところの「古今貴賤のへだて」の上に考へえられた調和であつた。

それは、直接には、中古の中以上の人情風儀にみられる一の古典的調和に外ならないが、同時に千載の規矩準繩として我々にせまるところの典型だつたのである。

彼に従へば、歌は實情のまゝに詠み出なければならぬが、同時に人のあはれと思ふところが大切であるから、後の世の「耳ぢかくこゝろ急やすき」鄙俗の語をつらねては、みやびを失ふ。ひとは、「心ことばの雅なるをめでてあはれとおもふ」のであるから、古へのまことのみやびを身につけ、後の世のさかしら心の「つくり風流」(玉かつま、増全八ノ二〇頁)から離れなければならぬ。かやうに、今の世のきたなく、いやしき情を去つて、美はしく、みやびたる古の情に就くのは、いつはりながらいつはりにあらず、心詞をこの一境に於て調和し、形成する「歌のまこと」なのである。左様な、歌のまことは、今のまゝなる現實とはちがふ。しかし乍ら、今の世のいやしくきたない心詞をはなれて、古へのみやびにかへるところに、歌のまことがあるとすればそれこそ眞に詠歌の現實と考ふべきものである。それは、今のまゝなる現實の理想化、乃至理想化されたる現實に外ならないが、彼の場合、みやびに住するといふことは、左様な理想を内に宿した現實に座することであつた。

かのよきさまにいふとはよき事のかぎりをえりいといへるがごとく、歌も物語も物の哀れを深くいひて、見る人きく人の、深く感じて物のあはれをしらんことを思へるなれば……(紫文要領下、

すなはち、見る人聞く人にふかく感ぜしめんがために、技巧的に「もののはれをことさらにふかくかきな」(全上)す場合も考へられるが、それとても、「もはら偽にしもあらずまことの詠め」(石上私淑言三、増全十ノ二〇八頁)であつて、雅びの趣に添ふ所以であつた。同様に源氏物語に於て、「よき人の手本」として描き出された源氏の君も、今の世にはありさうもない理想の人物であらうが、しかし雅びたる古への御代に於ては矢張り非現實ではない。といふよりも、歌詠む人にとつては今の現に存在しうる人物なのである。それは、何事も「たらずさし過したる事なき」(全上)心の深さに於て、「よきほど」に保たれた調和を示すものであり、左様ないやう人間美が、そがて「みやび」の理想にかなひ、同時に「いり」或は「えん」といはれる文藝美となるのである。されば、物のはれと雅びが一つのものとなつて存するこの歌物語の現實の深い意味を理解することなく、「たゞあやしめづらしき事を書きたるふみそのみ、好みめで」^一「なだらかにあはれを見せたる」^二みやびの文どもを、「興なきがごと思ふ」^三人達は、たとへ歌物語を好むとはいへ、^四「ものごとくもしらぬお社太」といふ外はないのである(玉のをくし、増全七ノ四七七頁)。

以上を要するに、歌物語は物のはれを「本體」とし、物のはれをしることは、^五そがて、人のあるがまゝの情のまことに足揚する所以であつた。而して、情のまことは、^六外的に興へられた現實ではないが、むしろ左様な現實をなりたしめる根據として、^七一層深い意味で、^八人間の現實を意味するもの考へられる。文藝とはまさに、^九かくの如き現實を現實として描き出すところに、その本體が認められね

ばならない。これが彼の源語研究の歌學的な結論であり、左への歌物語に及ぶ文藝本質論に外ならなかつた。ところで、何を現實と考へ、何れに「情のまこと」を感ずるかは、如上の歌學的な見解を丁度超へたところから出發する。それは創作の問題であり、享受の問題なのである。彼の場合、それは「みやび」として存することによつて——「層正確には、源氏物語や新古今のみやびを雅びとすることによつて、眞に詠歌の現實をとりもどし、情のまことをまこととする」ことが出来る。この點宣長が、歌物語の本質として物のあはれを説き、本質上の主義として「情のまこと」の寫實主義をとつたといふこと、詠歌の實際にあつては、みやびを旨とし、制作上の主義として「情のまこと」の寫實主義を説いたといふことは何れも區別して考へねばならないのである。たゞ、かくのごとき分析は、彼の學問をまさに學問として、再び問題としようとする我々の立場が導き出した原理的な分析にすぎず、詠歌といふ絶對的な作家にとつてかけがへのない現實に於ては、もとより統一されて存するのである。何れにせよ、歌物語の世界にこそ、「情のまこと」が、その意味で人間の現實が生きつゞけてゐる。彼の場合、左様な人間の、眞に現實の名に値ひする現實を、實は古典の世界にみる事により、古典的であることによつて、はじめて現實的であることが出来たのであつた。

（以下は本文の補綴的な内容であり、主眼から外れており、本文の理解に直接関係しないと思われる。）